

が(辞書的な多義性とよぶ),メタファ(「学校の設立はいばらの道だ」)や間接的言語行為(「辞書,もってますか」:質問とも要求とも取れる)なども,辞書的には定義されないが,多義的である。本研究では,このような,複数の意味が辞書的に定義されない多義性(非辞書的な多義性とよぶ)を問題にした。

論文は5部,9章より成る。第1部では先行研究と問題,第2部では多義性の原因となる推論枠組,第3部では多義性の解決に関わる文脈の内容,第4部では同じく多義性の解決に関わる文脈の動的性質,第5部では文脈と多義性解決のモデルを提示した。以下,各部について述べる。第1部(1章):非辞書的な多義性に関する先行研究と問題

第1部では辞書的な多義性に対して非辞書的な多義性(以下,単に多義性とする)を区別し,先行研究を検討した。そして多義性は,1つの表現から推論枠組によって推論される複数の解釈として,またその解決は,複数の解釈の中からひとつを文脈によって選ぶこととして捉えられることを示唆し,第2部以降の研究の方向を定めた。第2部(2章,3章):非辞書的な多義性と推論の枠組

第2部は多義性の原因となる推論枠組についての研究である。被験者に命題とともに接続詞(2章では「だから」,3章では「だけど」)を与え,その後続く文を作ってもらい。そして「だから/だけど」以下を検討する事により,被験者がその命題をどのように解釈していたかを推測し,その推論枠組を検討する。その結果,人は少なくとも4つの推論枠組(変換,経験的推論,対立/類比,言及)を用いて,命題から情報を引き出すことが見出された。このような枠組によって,人は辞書的には一意な命題を複数の仕方で解釈することができ,それが多義性の原因のひとつとなると考えられる。

第3部(4章,5章,6章):文脈の内容

第2,3部は多義性の解決に関わる文脈の研究である。第3部では間接的要求,拒否を取り上げ,文脈の内容——どのような内容の情報が文脈として与えられたとき,表現は一意に解釈されるのか——を調べた。4章では,間接的要求が要求として解釈されるのに必要な言語学的特徴,5,6章では,心理・社会的情報を同定し,間接的要求,拒否が理解されるためには,話し手,聞き手の目標や状況に関する知識が文脈として必要であることを示した。

第4部(7章,8章):文脈の動的性質

第4部では文脈の動的な性質——どのような条件で情報が与えられたとき,その情報は文脈として効果的に働くのか——について,基礎的な実験を行った。7章では

文脈の形成,8章では保持について検討し,形成や保持といった文脈の動的な性質には,呈示される情報の量と呈示間隔が重要な要因として関わっていることを示した。第5部(9章):モデル化

第5部では,以上より得られた知見を基に,文脈を「生まれてから現在に至るまでの全ての直接,間接的経験によって得られた知識の構造,すなわちデータベース構造のうち,現時点での情報処理活動に積極的,流動的に関与している部分」と定義し,文脈と多義性の解決を人間の情報処理モデルの中に位置づける試みを行った。

従来の情報処理モデルでは,意識的処理と無意識的処理の区別,保持の連続性,保持される情報の形成に関して文脈を載せるには不十分な点がある。そこで,本章では従来のモデルを発展させた新しいモデルを提出した。まだラフなスケッチの状態であるが,基本的なアイデアは,心理学的実体としての多義性や文脈のイメージを伝えるのに役立つ,また,研究の指針となるであろう。

東京都立大学

文学博士

永井 徹 「対人恐怖的心性に関する心理学的研究」

対人恐怖が我国において,その発症人数が非常に多い神経症であることは,従来からしばしば指摘されている。さらに,また一般健康者において,青年期にこのような状態を示す者が多いことも周知の通りである。本論文では,対人関係における自分自身の在り方を,関係的自己と定義し,対人恐怖とは,この関係的自己を安定して維持することが出来ない状態として考えている。そして,一般健康者においても共通に認められる対人恐怖的心性の構造とその特徴を,統計的方法や性格検査,さらにケース研究を用いて多面的角度から明らかにし,青年期の正常な発達過程における問題意識として捉えようと考えている。本論文は5つの方向から,合計13の研究を行い,対人恐怖的心性の実態を明らかにしようとする意図している。

1. 対人恐怖的心性の構造について

研究1では,対人恐怖の問題に悩んでいる人の訴えをI,対人状況における行動の特徴,II,関係的自己意識,III,内省的自己意識,以上の3つの次元に分けて,対人恐怖的心性の質問票を作成している。研究2では,その質問票を用いて,一般健康者における対人恐怖的心性の発達的变化の在り方を中学生・高校生・大学生のそれぞれについて明らかにしている。研究3では,青年期の性的な成熟の程度,Identityの確立の程度,そして青年期の問題として近年注目されている Student・Apathyの問題との関係を調べてみた。

2. 規定している環境的要因の研究

次の研究4と研究5では対人恐怖的心性の規定要因の1つである地域的環境的要因と両親との関係について調べている。

3. パーソナリティとの関連について

研究6では、TSPS (Two-Sided Personality Scale) を用いて、対人恐怖的心性を強く自覚している者の群のほうが、より性格の二面性の併存を許容していることを明らかにしている。研究7は、対人恐怖的心性とパーソナリティの健康さとの関連について、自我の強さ (Ego Strength) を表わすと考えられるロールシャッハ予後評定尺度 (RPRS) を中心に明らかにした。研究8では、対人恐怖的心性の自覚が高い者の中で、今までに持った「悩み」について第三者に相談しようと思ったか、全く第三者に相談しようとは思わなかったかの二群に分け、ロールシャッハ予後評定尺度を中心に調べてみた。

4. 事例研究からみた対人恐怖の問題について

研究9では、実際に筆者が治療的関わりを持った対人恐怖的な問題を主訴として来談して来た24のケースについて、高校生・大学生・正規の職に就いていない者・正規の職に就いている者、以上の4つの群に分けて、それぞれのケースについて、主訴、問題の経過、生育歴、家族についてまとめ、考察した。

5. 心理治療過程の研究

研究10から研究13までは、それぞれ個人の心理治療過程について記述し、その個人の自己実現という観点から考察している。

以上のような本論文の研究結果より、対人恐怖的心性の自覚は、関係的自己の気づきとその混乱として捉えられるものと考えられた。これは青年期の正常な発達過程において体験される一種の危機的な体験としてみることができ、自己を確立していく上で非常に重要な手掛かりを与えてくれる側面のあることが明らかとなっている。

名古屋大学

教育学博士

山田洋子 「乳児期における言語機能の基礎過程としての認識行動とコミュニケーション行動の発達」

本論文では、「有意味語の出現に先立つ言語機能の基礎となる行動の構造は何か」というテーマに関する筆者のこれまでの研究をまとめて理論的考察をした。このテーマは乳児期の発達の総決算に位置する要の問題であるとともに、言語の本質を理解するという理論的な目的のためにも、言語発達に遅滞がみられる障害児の治療教育という実践的な目的のためにも、必要で切実な問題である。従来は言語発達の前段階として、音声の行動のみに注目

しがちであったが、認識機能や伝達機能などより幅広い文脈からのアプローチが必要である。しかも思弁的ではなく行動レベルで把握されなければならない。そのためには実験法と観察法のそれぞれの長所を生かして併用するという方法論が有効である。

そこで主論文では、主に実験的研究のデータを基にし、認識行動に重点をおいて考察した。コミュニケーション行動の考察は、主に行動観察データを基にしたが、その詳細は副論文として提出した著書『ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち1 (新曜社)』に記述した。

有意味語出現前の乳児期後半 (生後9か月頃) から生じる、言語機能と部分的にも機能的な基礎を共有している行動の構造として、認識行動においては「静観的認識行動の開始」、コミュニケーション行動においては「三項関係の形成」という2つに大きく統合される発達の变化が考えられる。

静観的認識行動の開始は、1) 注視様式、2) 手操作様式、3) 乳児の生活空間の3側面の発達の变化によって示された。表象は、Piaget が考えるように感覚運動的知能の内化としてだけではなく、自己 (self) の居場所としての心理的場所 [ここ] の形成と関連づけて、「ここにいながらここにはないものを見る」あるいは「ここにいながら遠くの現前しない空間をも視野に入れる」行動として考えるべきである。したがって表象発生の前に、「行くことができるにもかかわらず、ここにとどまって遠く (あそこ) を見る」という静観的認識行動が始まることは、大変重要である。

三項関係の形成は、1) 指さし、提示、手渡しなど「人にも物を見せる行動」、2) ボールのやりとり、いないないバァー、いやいやゲームなど「やりとりゲーム」、3) 泣きの道具化など「情動の直接表出から媒介項を含む伝達行動への発達」の3側面の発達の变化として示された。

生後9か月頃から、初期には別々の文脈で発達した対人関係と対物関係の2つの行動様式が文脈を越えて結合され、「誰か (人) に何か (物) を」の関係が形成される。つまり「乳児一人」「乳児一物」の二項関係から「乳児-x (もの) 一人」の三項関係へと発達する。それによって、共感的な対人関係をつくるために対物的な実践的行動で鍛えられたルールの使用が可能になる。また媒介項の挿入によって、情動の直接的な表出ではなく、間接化した意図的な表現形式での伝達が可能になる。そして次の段階 (1歳代) では三項関係は、xの項に「言葉」が挿入されて会話的關係へと変化し、同じ心理的場所 [ここ] にすむ他者と意味を共同生成するベースとして機能すると考えられる。